

広野文芸欄

季題 当季自由句

広野町文月句会

さらさらと風に任せる竹の秋
暑さ来てゆらりと刻む大時計
幾度も闇にとまどふ初螢

西山子

山田 基星
子と見上げ指さす電線の夏つばめ
子の指のんでん虫の尻を押す
雷鳴や無口となりし孫とをり

酒井 津祢

土管より噴き出る水や夏薊
この町の秀峰隠す夏の霧
雨晴れてほたるぶくろの今朝の道

鯨岡 一生

雷に怯ゆる小犬膝の中
穂の先にとまりてゆるる夏の蝶
毛虫這ひじやるる小犬の後ずさり

鯨岡 正子
露をむく匂ひに浮かぶ母の顔
散る音に重さありけり夏椿
孤独といふ自由広がる雲の峰

阿部 真生

散る桜山なみ揺らす風のあり
初夏の風漁火遠く波の音
花は葉に亡き友偲ぶバーベキュー

根本 山水

キャベツ売りの勧め上手やまとめ買ふ
山梨の十九年目に花をつく
野良仕事小鳥の声にはかどりて

宮下 純子
若やいでおけさを踊る梅雨の宿
湖の森閑として花卯木
絵手紙のうす紫の花擬宝珠

遠藤健太郎

ひと休み腹いっぱい青田風
同好の師もゐて鮎の浅見川
さゆらぎのほたるぶくろや昼の月

塩 史子

職退くと友の便りやあやめ咲く
匆忙なる日々なのなごみのさつきかな
病床に遠郭公の届けけり

広野みなづき短歌会七月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

逝きて久しき吾子の夢見て夫と二人今朝
改めて香を焚きたり
母を恋ふ孫の姿のいぢらしさ遠き日の吾
もかくありしと思ふ
亡き母の踏むきし姿想ひ出づ茶に染むる
指をマニキュアと笑ふ 猪狩ユリ子

娘の結納きまりて心安らげり亡き妻思ひ
つつ祝いの酒のむ
睦まじく久遠をちぎるつの樽の寿の酒し
みて味はふ
老人の移動学習のバスの旅小雨の予報に
ひそとバス待つ 菅原 泰郎

六月の冷たき雨に惑ひつつ利尻富士へと
未明に宿出づ
茫茫たる視界の果ての地藏岩ガイドの指
先黙し見つむる
船窓は闇に閉ざさるフェリーの湯に採ま
るる如く一人浸りぬ
お互ひに知らざる人の話題増し時折淋し
き思ひのきざす 山内 洋子

ダイケアで最長老と言はれても心中ひそ
かに「何をヒヨッコが」と思ふ
朝の陽に眩しく映える窓の辺に娘の写真
を飽かず眺むる 小澤 健次

静かなる店の中見て客待てばめぐる思ひも
金にかかはる
法事より帰ってみれば自転車を盗まれ我は
ただに驚ろく 田副 耕一

新田 里子

楽しみの一夜に消えしサクラランボ一足先
の客のむく鳥
春雷の轟音一つとどろきしのみにて海へ遠
のきゆけり

父親の頑固さ嘆く息子なるもやがてお前
もと吾はひそかに
寝ねられぬままに聴きある午前三時貨物
列車の遠のく音を
この年令にまさきの生垣いかにせんと佇
つ老い夫の後姿わびし 木村ミヨ子

逝きし母を思ひ高齢の師を思ふ年なみと
いふ言葉かなしも
久びさに遠住む従兄に逢ひたれば話は盡
きずなくさめらるる 藤田 孝夫

山口 歌子

地続きの広き駐車場も日昏れつつ終の一
台の音も遠去る
選歌済み出でて仰げる宵の空ためらふ如
く滲む星かげ
六十余年ぶりに集ひしクラス会語らひ尽
きず身のほのぼのし

